六　かささぎの　渡せる橋に　置く霜の　白きを見れば　夜ぞ更けにける

大伴家持

〈声に出してよんでみよう〉

カササギノ　ワタセルハシニ　オクシモノ

シロキオミレバ　ヨゾフケニケル

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では[wo]と発音し、助詞以外の一般の語にも用いられていました。十一世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が[o]から[wo]に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに十七～十八世紀頃、両者ともに[o]と発音されるようになり、現在に至っています。



星



鳥

〈どんな意味だろう〉

（七夕の夜）　鵲　が（羽を並べて織姫を）渡らせた橋に

おりる霜が白いのを見ると

夜が更けたのだなあ・・・！

＊鵲は、鳥の名。中国の伝説で、天の川の両岸に引き裂かれた牽牛（彦星）と織女（織姫）が七月七日の夜、一年に一度だけ会える時、鵲が羽を連ね、天の川を渡れるよう橋を架ける、と言います。なお、霜や露が「おりる」ことを、古語では「置く」と言いました。



牽牛・天の川・織女

〈解説〉

夏の七夕伝説を冬に結びつけて対照させ、ロマンチックに詠み上げた歌です。当時の知識階級は、先進国である中国の文化に強く憧れていました。満天の星と冴えわたる冬の霜夜に、身のひきしまるような清冽さを感じさせる一首です。

〈作者と出典〉

作者の**大伴家持**（？～七八五）は、奈良時代の人。現存する最古の歌集である『**万葉集**』（八世紀頃成立）の編者と考えられています。中央や地方の諸官を歴任しましたが、政治的には必ずしも恵まれませんでした。

この「かささぎの」の歌の出典は『新古今和歌集』（十三世紀頃成立）で、『万葉集』にはありません。このため、家持の作かどうか疑う説もありますが、異国情緒と浪漫あふれる詠みぶりは、家持の作にふさわしい、と見る説もあります。

『万葉集』所収の家持の歌としては、次のような歌が有名です。

新(あらた)しき　年の始めの　初春(はつはる)の　今日降る雪の　いや重(し)け吉事(よごと)

（新しい年の始めの初春の今日降る雪のように、ますます重(かさ)なれ、良い事よ）

うらうらに　照れる春日(はるび)に　雲雀(ひばり)上がり　心悲(こころかな)しも　一人し思へば

（うららかに照っている春の日に、雲雀が空高く上がり、心は悲しいなあ。一人で物思いにふけっていると・・・）

春の野に　霞(かすみ)たなびき　うら悲(がな)し　この夕かげに　鶯(うぐひす)鳴くも

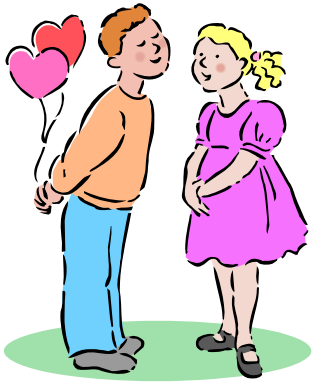
（春の野に霞がたなびいて、なんとなく悲しい。この夕暮れの光に、鶯(うぐいす)が鳴いているなあ。）

春の苑(その)　紅(くれなゐ)匂(にほ)ふ　桃(もも)の花　下照(したて)る道に　出(い)で立つ乙女(をとめ)

（春の庭園に、紅(くれない)色に美しく映えて咲く桃の花よ。その花の色が照り映える樹下(じゅか)の道に立ち出(い)でてたたずむ乙女(おとめ)よ。）

我(わ)が宿(やど)の　いささ群竹(むらたけ)　吹く風の　音のかそけき　この夕べかも

（私の家の幾(いく)ばくかの竹に、吹く風の、音のかすかな、この夕暮れであることよ。）



少年と少女